

## 「さいたま新都心編」

2000年12月6日

前回の街歩きはアミューズメント一色に終始したという反省の念に少々かられて、第9回目をむかえた今回は、「20世紀最後の街歩き」的な勢いも手伝い、真摯な態度で都市のあかりの調査に繰り出しました。

今回のターゲットは、さいたま新都心。2000年5月に街開きをし、9月にはLPAのプロジェクトでもある「さいたまスーパーアリーナ」や、「けやきひろば」などの商業施設がオープンしました。

興味深かったのは、このさいたま新都心全体の照明計画の指揮に照明デザイナーの近田玲子さんが携わっていらっしゃるということ。そのため、LPAの手がけた照明計画を前に団長自らの解説が聞ける、ということ以上に、都市計画と照明計画という大きなスケールでの調査が期待されました。

スタート地点さいたま新都心駅は、建築家鈴木エドワード氏設計によるシェル構造むきだしの少し歪んだカマボコのようなユニークな形状をした建築。この空間を横切る光のチューブが印象的でした。自由通路をとおって「けやきひろば」へ到着すると、6mピッチのグリッドに植えられたけやきはクリスマス電飾が付けられ非常にきらびやかでした。その奥には「森のパビリオン」というトランス



ルーセントなガラスの箱状の建物があり柔らかいあかりの表情を呈していました。近づくとその正体は3cm幅程度の白い不透明な部分と透明な部分が交互になったガラスの壁。団長曰く、この密度の微妙な違いでその行灯状のあかりの出来映えが全然違ってくるのだそうです。光は非常に繊細なもの。通常ならこんな繊細で印象的な光を背景に、けやきの整然としたシルエットが浮かび上がってくる光景にありつけたはずでしたが、今回ばかりはクリスマスの華々しさが少々残念でした。広場の目玉的空間でもある「サンクンプラザ」も、本来なら、下のフロアからのあかりが漏れてくるガラスブロックが一面に広



がっているという印象的な光景にお目にかかれたはずですが、一面に広がっていたのは工事用のグリーンビニールシートでした。

そして広場を背にさいたまアリーナへ。ガラス壁面には3色のカラー蛍光灯が剥き出しでランダムにつけられています。入り口前に広がる床には紫色のインジケーターが4.5mグリッドで埋められていました。覗き込むと中身は赤と青のLEDでした。歩みを進めるにつれ、人気のない空間に有り余る光あり、



暗がりあり、そして団長の口から自身のプロジェクトにいろいろと酷評も下され、参加者の皆さんには興味深い体験だったのでは？しかし、空間の質を図面から読み取り、その施設の性質を考慮して照明を計画し、オペレーションをプログラムすることの難しさなどを再確認した思いでした。

調査のあとの恒例の懇親会でも、参加者皆さんから意見や感想がたくさん聞かれ、充実した探偵団調査となりました。

更に20世紀最後の街歩きはオマケつき！懇親会を終えて心もおなかも満たされ体温を取り戻したところで、再び探偵団活動再開という展開に。というのも、浦和でイルミネー

ションのイベントをやっているとの情報が入り、一同帰途の途中下車、しかも懇親会を終えたのが21:30頃で、そのイベントは10時終了だということから、もう大変。浦和駅からルートを追いながら走る約10分、その間色とりどりの電飾に飾られた町並みを横目にアーケード状の光のオブジェに到着しました。ようやくここでこのイベントが、光の回廊、光の壁掛けをコンセプトにした南イタリアから届いた光の祭典「浦和ルーチフェスタ



21」だということが判明。しばしそのきらびやかな光景を堪能しました。アーケードの天井面まで電飾でびっしりなので、アーケードが平面の連続で並んでいる東京のミレナリオとは違ったボリューム感のあるあかりの光景でした。

最後の消灯の瞬間もビデオに納めることができ、満足、満足。一足早く、往年の感慨にふけた思いでした。

(田中 智香)

## 第13回研究会サロン

【さいたま新都心調査報告 / 汐留 / 慶應義塾大学世紀越計画】

2000年12月11日

今回のサロンは、月曜日の夜ということもあり、いつもより少なめの15人の団員が集まりました。中には、卒業設計の真っ只中にもかかわらず、駆けつけてくれた団員もいらっしゃいました。

まず、過日行われたさいたま新都心の街歩き調査の報告がビデオを見ながら行われました。12月とあれば、街はクリスマスイルミネーション一色、埼玉ももちろん染まっていました。でもそのせいか、本来の魅力を覗うことができなかつた様です。例えば、地面のガラスブロックを通して下からの光が漏れるという計画のサンクンプラザにも、イルミネーションを考えてのことでしょうか、シートが敷かれてしまっていました。いずれにしてもできたばかり、これから成長していくものであり、まだ完成されていないという感想が聞こえてきました。まだ見に行かれてない方は是非見に行かれることをお勧めいたします。

団員たちは、新都心の調査が終わった後、ホテルが行っているイルミネーションを見に急いで浦和へと出発。これは、神戸のルミナリエや、東京で行われたミレナリオのように、イルミネーションがホテルのファサードとアーケードに施されたもので、浦和ルーチェフェスタ21です。いくつものアーチが間隔をおいて連なるルミナリエとは異なり、天井一面に電球が施されていたイルミネーションは、また違った印象だったようです。また、ぎりぎりに訪れたメリットでしょうか、消える瞬間をビデオに収めることができ、消えるという現象に一同なにかを感じた様子でした。

次に、フランス在住のアーティストである田原桂一氏が、現在開発が進む東京汐留の工事現場にあるクレーン車を利用して行って



いる光のインスタレーションの調査報告がありました。クレーン全体に無数のフラッシュランプがつけられ、それぞれが一定の周期で光ることで、ピカピカピカッと光るオブジェクトとなり、その周りにはたくさんのキセノンランプが置かれ、冬の澄んだ空へと光があがっていました。乱雑な屋の姿は闇の中に消え、汐留という大きなステージに美しい光のオブジェが置かれたといった感じでした。

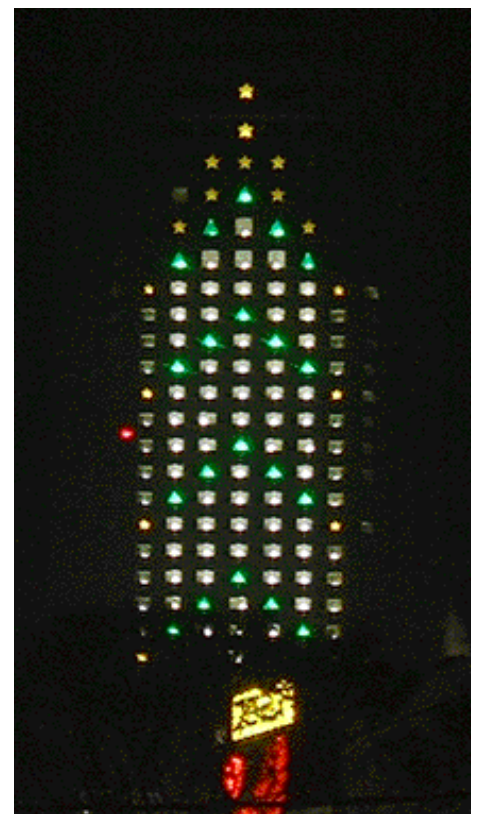
さて、面出団長からは、昨夏訪れた南アフリカのスライドを楽しいお話を聞きながら見せてもらいました。世界で一番治安が悪いと言われているヨハネスブルグの黒人地区では、何もしないと夜には真っ暗になってしまうさらに危険な場所になってしまうため、一定の間隔で高さ30mのマスト灯が置かれ、上から照らされているという報告がありました。やはり危険な場所では、美しい闇など通用しないのでしょうか？その他にもかわいらしい象やキリン、ライオンなどのスライドを観たりと団長の楽しいアフリカ旅行を垣間見ることができました。

最後に麻生団員、西原団員、沢田団員から進行中の企画発表がありました。慶應義塾大学で行われる21世紀カウントダウンの時に、歴史ある旧図書館をライトアップするという企画で、照明実験のスライドを見ながら一同説明を聞き、アイデア出しなど話し合いを行いました。ライトアップということにこだわらず訪れた人が参加できるような提案が良いのでは？という意見や、戸恒団員からは参考事例として、以前行われた東京大学のライトアップ実験の様子がスライドで発表されたりと、皆で考え、まさにサロンの

醍醐味といった感じでした。次回のサロンでは是非当日の様子を発表していただきたいとすべての団員が思っていることでしょう。

(竹内 聡美)

(9ページにイベントのレポートが掲載されています。)



# 面出の探偵ノート

照明探偵団ホームページにて連載中！

<http://www.lighting.co.jp/tanteidan/>

ご意見・ご感想をお寄せ下さい

tanteidan@ppp.bekkoame.ne.jp

●第24号 2001年3月05日 月曜日

話題の建築と光・せんだいメディアテークの出現

話題の建築・せんだいメディアテークの施設が、2001年1月26日に開業しました。建築設計は伊東豊雄さんとその息の合った仲間たち、そして構造設計の佐々木睦朗さん。1995年に公開設計競技に応募した235案の中から磯崎新さん（審査委員長）によって選ばれた最優秀賞でもあります。私たちLPAもこのコンペの前後からこの建築の全般に渡って照明デザインを協力してきました。

世の中には色々変わった姿の建築がありますが、このように美しく斬新な気配を放っている公共建築物も珍しいのではないかと思います。施設の中身は複合文化施設で、スタジオ、マルチメディア図書館、ギャラリー、多目的スペース、プラザ、ショップ、カフェ、などなど…。延床面積は約22000平方メートル、鉄骨造＋一部鉄筋コンクリート造、総工費約130億円、地下2階地上7階建てで、一辺が約50mの正方形の平面をしています。ユラユラと波に漂う海草のような構造体が、400mmという薄い床スラブを貫通している様がイメージ通りに実現されました。仙台の有名な定禅寺通りに面したファサードには二重の透明ガラスがはめ込まれていて、道行く人に建築内部の様々な様子を透視させ、市民に開かれた新しいタイプの公共施設のモデルを提示しています。まあ、世紀末を代表する新建築であり、たまたまオープンが2001年1月になったので、21世紀幕開けを飾る新建築でもあるわけですが、これほど野心的でコンセプトチュアラルな表現に成功した例も少ないと思います。色々な建築雑誌などに同時に発表されることでしょうか、紙面の写真を眺めるだけでなく、是非一度、仙台に行ってこの建築の空気を細かく観察してみるべきでしょう。色々なことが感じとれるはずですよ。

照明計画のコンセプトは、如何にこの特殊な構造とガラスから与えられる透明なイメージを、昼夜の対比の中で鮮明に視覚化するか…、ということです。そしてもちろんその上で、施設が市民活動にとってフレキシブルに使いやすい照明システムを実現することです。建築のコンセプトが単純明快であることが、如何に光のコンセプトを矛盾なく引き出すか、の好例といえます。

そのコンセプトを照明手法として展開するとき、重要だったのが、チューブの中を貫通する自然光と人工光の昼夜の対比、それと積層された各階内部と、それを串刺しにするチューブ内に満たされた光の対比です。

様々な紆余曲折を経たあとに、13本のチューブのうちの各階中央に位置する2本に限定して、屋上階に設置された太陽光追尾装置を利用して、屋光を建築内部に取り入れる工夫を施すことにしました。太陽光を建築内部に反射鏡を利用して引き込むシステムは、近年色々計画されていますが、設備を投資するほどの合理的な光の量を得るに至っていないのが実情のようです。この建築においても、太陽光追尾によるチューブ内への光の取り入れは、光の量を取り入れることよりも、むしろ人工照明に支配された室内労働に刻々と変化する建築外部の気配を伝える役割が評価されているようです。私の行ったときにも、室内の一部に坪庭から落ちてくるかのような、気持ちの良い太陽の反射光が降り注いでいました。夜間にはこれが一変して、



地下2階と屋上階に設置された人工照明によって、チューブ内部は輝き立ってくるように計画されています。

夜間において、フラットスラブによって積層された光の束と、チューブ内部に満たされた貫通する光を対比するために、3500K（ケルビン）と5700Kという色温度の対比を意図しました。つまり温白色というやや暖かい色の光と、水銀ランプによる白く冷たい色の光を水平垂直で対比させているのです。この考え方は、建築断面図に光の色を概念的に塗ってみると解り易いのですが、地下1階の駐車場にはさらに青白色の蛍光ランプを使用していることもあって、水平の暖かい光、垂直の冷たい光、のコンセプトがいっそう明確に説明できます。しかし最終的な夜の建築外観では各階の床の仕上げ色などの影響もあって、積層された各階は様々な固有の表情を見せているのも、面白いところですよ。

伊東豊雄さんはこの建築の中で様々な種類の虚ろな光を交錯させようとしています。単純化された建築の中で自然光と人工光が入り組み透層する仕掛け。室内から外の気配を虚ろに感じたり、チューブを介して上下の積層空間が視覚的に繋がられたり…。巧みに組み立てられたそれぞれの機能空間が、しかも優しい表情に仕上げられているのです。昼から夜へ…。ゆっくり時間を掛けてせんだいメディアテークに漂う光を観察したいものです。

（面出 薫）

# 慶應大学世紀送迎会ライトアップ

麻生哲平 沢田妙 西原孝太郎



昨年末、世紀越えのイベントが各地でたくさん行われました。慶應大学世紀送迎会もその1つでした。企画・準備等はほとんど慶應の学生が主に取り組んでいましたが、照明班は3人中2人が他大生でした。ふとしたきっかけでこの会のお手伝いをさせて頂くことになりました。

野外イベント、ステージなどの企画が順調に進行し、盛り上がっていく中でキャンパス内の照明については置き去りのままでした。本番まであと1ヶ月程しかなく、何ができるかを3人で考え、校内のライトアップをする事になりました。

3人ともライトアップをするのは初めてでした。そこでまず色々な所を見て歩く事になりました。東京駅や日比谷、有楽町、新宿と、どこもまばゆい程のライトアップが施されていました。また、川越の小江戸で行われた街ぐるみのライトアップも見に行きました。3人で見ていると色々な所に気付く事ができ、面白かったです。

慶應大学のライトアップでは特に安全性の確保を第一に考え、歩道に小さなライトを設置する事と、大学を象徴する古い校舎（特に旧図書館）のライトアップ、そして中庭にある大銀杏のライトアップをする事にしました。大銀杏は真冬の為すっかり葉が落ちてしまっていたのですが、シンボルでもあり、どうしても照らし出したかったので真下から1500WのFQを3本当て、全体を包み込むように下から500Wを4本、300Wを3本当て、大木、枝振りを白く浮かび上がらせ威厳を強調しました。

旧図書館は東京駅などからヒントを得、ただ壁面を当てるだけでなく、中央部の美しいディテールを強く、そして側面（この面は大学に向かってくる人々からも見える）は弱く、とりズムをつけて光を当てました。一様に当たっているように見えても、なぜ綺麗だな、と思うかにはきちんと仕掛けがあるのだなと思いました。ライトアップを考える際、安全面という事、とにかくそれが本当に大切に

必要だと感じ取りました。近田玲子さんにもアドバイスを頂き、ライトは導線にもなるという事、先ず最低条件として安全性をとって、その後どの様に当てるかなどと考えていくと自ずと見えてくるものだな、といい勉強をさせて頂きました。

本番当日の12月31日夕方、雨だけが心配でしたがなんとか持ちこたえ、たくさんの方がいらっやいました。旧図書館の前で写真を並んで撮っている人々、大銀杏を見上げて微笑む親子などを見ていると、本当にやって良かったな、と思いました。

## 実験のお話

予算があまりなく、本番前の実験用照明機材を借りるお金もなかった私達は、メンバーの西原のバイト先で屋内用のライトを借りて野外での実験を強行することになりました。日が暮れてから夜中に職員さんを連れ出して、デジカメ・ライト・延長コードを手に校内を駆け回った事は今でも忘れる事はできません。

もう1つ、お金のない私達の頭を悩ませたのは歩道に設置するライトでした。

数にして約100台。安価でよいものを探すと言う事で、先ず渋谷の100円ショップで素材探しを始めました。そこでタッチライトを見つけ、これに何かシェードをつけようということになり、和紙でできた提灯を見つけました。試しに幾つか買って帰り、早く見たくて帰りに暗闇を探して実験をしてみました。

渋谷で闇を見つけるのは本当に大変で、やっと見つけたのは路地裏の工事現場の脇でした。中華料理屋さんのゴミ置場の中、ゴミの横でちょうちんライトはとても美しく光っていました。大喜びでその日は帰ったのですが、後日改めて発注しようとしたところ、年末の為に在庫分しか扱えないとの事で到底数が足りない事が分かり、また別の案を考えねばならなくなりました。100円ショップや街を見て歩いてもピンとこないの、合羽橋道具街に3人で行きました。ヘトヘトになるまで歩き

回って、白い紙箱を見つけ、それに和紙をはるライトを手作りすることになりました。中の電球は秋葉原で手に入れた豆球セットを組み立てて入れる事にしました。

実験をする事によって分かった事は数限りありませんが、何より実験をしないと何も分からない、という事が一番感じた事です。

最後に、、、

照明探偵団のサロンで、途中経過ながら発表させて頂く機会を与えてくださった事、そしてそれについての貴重な反応としてアドバイスを違った視点で頂けた事に私達3人は非常に感謝しています。知識も経験もない自分達にとってもいい助言となりました。と同時に改めてこういった情報交換の場所のありがたみと意義を感じました。どうもありがとうございました。

上：旧図書館のライトアップ  
下：足下灯として使われた手作りちょうちん



# 照明探偵団 WEB サイトリニューアル & URL 変更！

## tanteidan.org 公開

これまで事務局で自前製造していた照明探偵団 WEB サイトでしたが、もう少し整理して親しまれるものにしよと言うことで、プロの協力をもらい昨年末にリニューアルいたしました。また、これに伴い照明探偵団のホームページ URL が変更になりました。一新されたサイトをぜひ覗いてみてください。

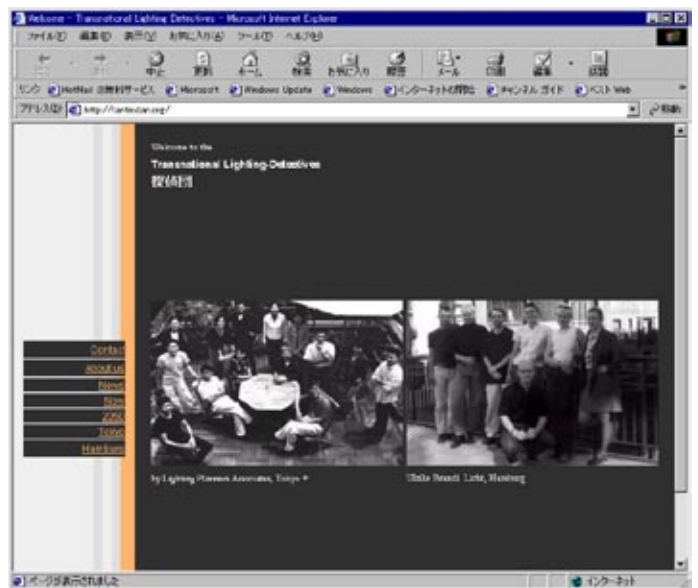
それに加えて、探偵団活動を世界中に広げようという申し入れがありドイツ・ハンブルグの照明デザイン事務所のメンバーと共同して「tanteidan.org」という Web サイトも開設しました。

これからも一層激しく更新していくつもりです。ご期待下さい。



照明探偵団 WEB サイト

<http://www.lighting.co.jp/tanteidan/>



<http://www.tanteidan.org/>

## ★★★投稿規定★★★

照明探偵団通信 vol.10 (次号) の原稿を募集しています。独自の照明探偵レポート、光に思う今日の日本、照明について知りたいこと、疑問に思っていることなどなど、テーマは何でも結構です。日頃ひかり、あかりなどについて思っていることや様々なレポートを照明探偵団通信に発表してみませんか。原稿の送付方法は、

- 原稿をテキスト形式で保存したフロッピーを送付
- e-mail で送付

(メール上記述でも原稿テキストファイル添付でも OK)

- FAX で送付 ● 郵送で送付

のいずれかをお願いいたします。また、このほかの送付方法をお考えの方は、事務局までご相談ください。投稿お待ちしております！

照明探偵団・事務局

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10 ライティングプランナーズアソシエーツ内  
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023  
e-mail=tanteidan@ppp.bekkoame.ne.jp <http://www.lighting.co.jp/tanteidan/>

【照明探偵団の活動は以下の 23 社にご協賛いただいております。】

ルートロンスカ株式会社 岩崎電気株式会社 松下電工株式会社 東芝ライテック株式会社 小糸工業株式会社 三菱レイヨン株式会社  
ヤマギワ株式会社 株式会社ウシオスペックス 山田照明株式会社 マックスレイ株式会社 オーデリック株式会社 ニッポ電機株式会社  
株式会社エルコ・トートー 株式会社ウシオユーテック 日本フィリップス株式会社 小泉産業株式会社 株式会社遠藤照明  
三菱電機照明株式会社 大光電機株式会社 湘南工作販売株式会社 金門電気株式会社 ヨシモトポール株式会社 日本電池株式会社

## 照明探偵団日記

空間は、地下もしくは全く窓がない空間でない限り、必ず昼と夜とを迎えます。空間によっては全く異なる昼のカオと夜のカオを持っている場合も多々あります。人間の活動時間は昼の方が長いので、昼のカオの方が人目にふれる機会は多いですが、建築でも光をまとった夜の姿の方が強い印象となつて残ることがあるのも事実です。近頃の建築雑誌に建築の夜景写真が多いのも興味深いところです。照明探偵としては夜のカオを重点的に見てしまいがちですが、同じ空間の昼のカオをきちんと見ておくのも大切なことでしょう。夜の光空間としては気持ちの良いものでも、例えば昼間の照明器具の姿が邪魔な存在では結局良い空間にはなり得ないと言えるのではないのでしょうか。

本当は同じ空間の昼と夜の両方のカオを見るのが一番良いのですが、やむを得ず片方しか見られない場合には、昼はどうか、夜はどうか、照明や構造や素材を材料に、もう一方を推理するのもおもしろい探偵です。

(田中 裕美子)